



モンゴル牧畜システムの特徴と変容

Characteristics and transformation of pastoral system in Mongolia

小長谷 有紀

KONAGAYA Yuki

モンゴル牧畜システムは移動性が高いという特徴に加えて、多くのオスを維持し、多種の家畜を多角的に利用するという特徴を有しており、自然環境のみならず、社会環境にも適応的であった。それは単なる生存経済ではなく、軍事産業であり情報産業でもあった。20世紀になると社会主義的近代化のもとで脱軍事化すなわち畜産業化が進行した。市場経済へ移行してからは、牧畜に従事する人々すなわち遊牧民の間で地域格差と世帯格差が拡大している。今日、遊牧民たちは必ずしも自然環境だけではなく、むしろ社会環境に対して積極的に適応して移動している。

Mongolian Pastoral System has high mobility and has two characteristics in husbandry. One is the high ratio of castrated males in the herds and the other is the diverse use of animals. These characteristics are adaptations to the natural and social environments of the Mongolian Plateau. Mongolian nomadic pastoralism is not simply a subsistence economy, rather it is a military economy with information technology. In the 20th century, along with demilitarization associated with socialist modernization, nomadic pastoralism was turned into animal husbandry. Today, as Mongolia undergoes transformation into market economy, regional differences are widening, so are household differences. In this situation, herders still prefer to move in order to get better access to social resources, rather than natural resources.

キーワード： 遊牧，牧畜システム，モンゴル，社会主義，市場経済

Key words: nomadic pastoralism, pastoral system, Mongolia, socialism, market economy

I はじめに—遊牧という牧畜システム

モンゴル高原では古来より匈奴，烏桓，鮮卑，柔然，高車，突厥など様々な名で知られる諸集団が家畜を利用しながら勢力を展開してきた。その牧畜システムの詳細は知りえないが、「移動性の高さ」が注目されてきたことは確かである。例えば、司馬遷は『史記』の匈奴列伝で「畜は草を食らい水を飲み、時に随いて転移す」と表現している。こうした表現はその後も諸文献に継承された。『後漢書』の烏桓伝には「水草に随い放牧し、居

に常処なし。穹廬を以って舎となす」とあり、やや下って『北史』の突厥伝には「穹廬氈帳，水草を随逐うして遷徙する」とある。このように、中国では北方の牧畜民の移動性について早くから注目され、記録されてきた。一般にこれが遊牧と呼ばれている。

本稿では、モンゴル国における移動性の高い牧畜システムについてとりあげ、社会主義的近代化ならびに市場経済化として変容しつつある現状について解説する。

遊牧を過去の遺産あるいはロマンチズムとし

て捉えることなく、近代の変容を経て今日なお移りゆく現代的象徴として理解することに貢献できれば幸いである。

II 環境への適応

モンゴル牧畜システムを解説するにあたって、まず、自然環境の特徴とそれへの適応、および社会環境の特徴とそれへの適応について要点を抽出する形式で述べる。

1. 自然環境への適応

ユーラシア大陸の中緯度地帯には、東西に広く草原がベルト状に広がっている。ただし、モンゴル高原の場合、平均気温が低いために蒸発散量は抑えられ、乾燥は穏やかである。さらに夏雨型であるという特徴を有する。この夏の恵みによってメスの家畜は孕み、産み、乳を出す。遊牧民の夏の食料は、子畜のために供される乳を横取りすることによって成り立っている。またこの夏の恵みを家畜たちは取り込んで越冬する。越冬に際して家畜は一般にやせ衰え、なかには越冬できないものもある。この越冬不可なものたちを事前に食として確保することによって、遊牧民は越冬する。このように季節に応じて家畜の活動を利用する生活様式は環境に対して適応的であると言えよう(小長谷 2005: 54-74)。

乾燥地域の最大の問題として降水量の時間的かつ空間的な偏差は大きい。恒常的に全国各地で気象災害にも見舞われる(篠田・森永 2005)。一定の場所で家畜の群れを飼育すると植生への致命的な負荷をもたらすので、降水量の時空的偏差に対応して家畜の群れによる植生への負荷を調整する必要が生じる。この調整を移動によって維持している牧畜システムがすなわち遊牧である。

モンゴル国の場合、その牧畜システムにおいて

以下のように移動性が顕著に認められる。第 1 に季節的に宿営地を変えること、第 2 に季節的宿営地には複数の候補があり、そのつど選択されること、第 3 に災害時には恒常的に利用する領域を超えた移動が認められること、第 4 に宿営地への移動とともに宿営集団の構成もまた変わりうることである。

遊牧における移動性の高さは自然環境に適応的であるばかりでなく、さらに自然環境を維持していることが今日、明らかになりつつある(藤田 2003)。

2. 社会環境への適応

モンゴル高原の社会的な特徴としては、オアシス都市の不在を特筆したい。ゴビ砂漠の中のアルタイ山麓に湧き水は存在するが、オアシス都市が歴史的に形成されてきたわけではない。換言すれば、極度に乾燥した地域にあって湧き水に依存して人々が集中して暮らすという歴史をもたないものである。自然環境を反映した社会環境の特徴としてあらかじめ確認しておきたい。なぜなら、この特徴は、恒常的な交換相手をもたないことを意味し、ひいては牧畜システムと密接に関係するからである。

モンゴル遊牧民たちは、西方のオアシス都市等を経てやって来る隊商を通じて贅沢品を得た。また明代の茶馬貿易などで知られるように、南方の農耕地域との境界域に設けられた定期市で制度的な交換を行なった。それらはいずれも日常的なマーケットではない。

こうした社会環境の特徴は、モンゴル高原の牧畜システムにおける去勢畜の割合を高くしている。オスが去勢されて大量に生き残るという特徴はモンゴル高原の歴史を考察するうえでも重要なポイントである。この点については、以下でやや詳しく述べよう。

Ⅲ 牧畜経営の特徴

モンゴルの牧畜を世界的に位置づける際の大きな特徴は移動性の高さであり、それゆえに遊牧と呼ばれてきた。さらに経営上の特徴としては「去勢オス畜が多いこと」と「多種類の家畜を併用すること」が挙げられる。これらは経営面に関する特徴であると同時に、社会環境や自然環境の特徴を反映している。

1. 去勢オス維持型

地中海地域で飼育されているヒツジの群れは大半がメスである。というのも、オスの多くは当歳で屠られるからである。いわばオスが間引きされた結果、群れの大半はメスとなる。さらに、世界中の諸畜民に関する記録を網羅的に整理した Dahl and Hjort (1976: 88 など) によれば、「ヒツジとヤギの群れはほとんどメスである」と明記されており、他の家畜でも同様である。

これに対してモンゴル国で維持されている家畜の中で成メスは半分以下である(表1)。

オスが積極的に屠られることのないまま生き残ってきた。ただし、オスたちは成熟したあとでメスを取り合って群れを分裂させることのないよう成熟前の段階で去勢されている。群れの中に多数のオスが去勢されて生き残るといふ点が、モンゴ

表1 家畜種別の成メスの割合[単位 千頭；％]
(National Statistical Office 2006 より算出)

	家畜の頭数	メスの頭数	メスの割合
ラクダ	254.2	76.3	30.0
ウマ	2029.1	569.7	28.1
ウシ	1963.6	764.3	38.9
ヒツジ	12884.5	5751.8	44.6
ヤギ	13267.2	5721.8	43.1
単純合計	30398.6	12883.9	42.4

ル牧畜システムにおける生態学上の最大の特徴であり、同時に経営上の特徴にもなる。

一般に、都市社会との交易が活発であれば、余分なオスをわざわざ去勢する必要はなく、子の段階で早々に搬出することができる。市場への搬出が容易であれば、子の段階で去勢されたオスが成長後いつまでも手元で維持されることは稀になる。このように、群れの中の去勢オスの多さは、経営上、商品化度が低いことを反映し、その意味で自給性が高いとみなされる。ただし、自給性の高さは必ずしも生存経済がかろうじて成立しているということにはならない。それどころか、むしろ自分たちで食べきれないほどの家畜を大量に手元に維持していることを意味している。

D. Sneath は社会主義以前の中央アジアの牧畜システムには「収益追求的 (yield-focused)」なタイプから「生存経済的 (subsistence)」なタイプまであったとみている (Humphrey and Sneath 1999: 218)。具体的な群れの構成上の特徴を把握するとさらに理解が深まるだろう。すなわち「利子 (yield)」とはまさに「去勢オス」であり、「生存経済的」とはメス中心の飼養を意味し、「利子に焦点をあてる」とは去勢オスの多い飼養を意味する。

そもそもモンゴルでは必ずしも商品経済への指向(収益の追求)が去勢オスの飼養を推進してきたわけではない。生存経済のためのメスのほかに、去勢オスという商品化も可能な家畜を売却せずに大量に手元に維持してきたのである。この特徴を「去勢オス維持型 (castrated male keeping)」と命名しておこう。

社会主義のもとで変容する以前から、大量のオスを殺さずに去勢して維持するという特徴を有してきた。この特徴は、オアシス都市などの恒常的な市場に恵まれないという社会環境と、オスを間引かずとも飼育できるほど恵まれているという自然環境とに呼応している。

こうして大量に生き残る去勢オス畜こそは、歴史上、大いに活躍した騎馬遊牧民の軍事力にほかならない。かつて世界で最速の乗り物であったウマも、世界で最強の曳き物であったラクダやウシも、去勢オスを役畜として利用したものである。大量に生き残された去勢オスは、まさしく軍事力として維持されてきた。役畜として供されないヒツジも食料補給部隊であるから軍事力の一部とみなして差し支えないであろう。

2. 万作型

モンゴル高原の遊牧に関する古典とも言うべき梅棹忠夫の『狩猟と遊牧の世界』では、世界の牧畜が4つに分類されている(梅棹 1976: 122)。中央アジアからモンゴルにかけての地域において遊牧される家畜は、ヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ(ヤクおよびヤクとウシとの雑種を含む)、ラクダの5種類である。一方、他の地域では1~2種類に限定される。

農耕の世界において、1つの種類が豊かに実る「豊作」とたくさんの種類が少しずつ実る「万作」という2つの類型を想定するなら、牧畜の世界においても同様に2種類が想定されうるだろう。モンゴル高原の牧畜システムは明らかに、後者の「万作型」に属する。

移動性の高さを確保するために大型家畜は必要であり、食料として小型家畜は重要である。夏は、ウマに乗り、ウシに車を曳かせる。冬はそうしたウマやウシの役割をラクダにゆだねる。いずれの種においても、去勢オスが役畜として重要であるばかりでなく、そのメスからは乳を搾り、貴重な乳製品ができあがる。ヒツジは屠れば食料になるが、屠らずとも、乳を利用したり、毛を利用したりすることができる。屠れば肉とともに毛皮を利用する。羊毛からフェルトを作るが、毛糸にして衣服を織ることはなかった。毛皮はそのまま敷物

にしたり、なめして皮衣にしたりする。このように、すべての家畜種を雌雄ともに多角的に利用する点が特徴的である。多角的な用途が展開されているという意味で自足性の高いシステムである。

IV 社会主義時代の変容

1911年の辛亥革命の結果、清朝の支配から解放されると、1921年に人民革命が起こるまでの間、モンゴルではチベット仏教の宗主である活仏をいただく政権が生まれた。その後、1924年にこの活仏が寂滅するに及んで、モンゴルはソ連に続いて世界で2番目の社会主義国すなわちモンゴル人民共和国となった。以来、1989年にペレストロイカの波が押し寄せて1990年に人民革命党による一党独裁を放棄し、さらに1992年には新憲法を制定してモンゴル国と国名を変えるまで、およそ70年の間、モンゴルは旧ソ連の指導のもとで社会主義による近代化に取り組んだ。

近代化の諸側面のうち、産業部門では以下の3つの大きな変化が挙げられる。第1に草原にあった遊牧が変えられたこと、第2に草原になかった農業部門が創設されたこと、第3に草原でない都市が作られ、そこで工業部門が創設されたことである(小長谷 2004)。この新しい産業部門の担い手として工場労働者を作り出すために、草原では女性たちがせつせと子どもを産むこととなった(小長谷 1999)。その結果、人口は急増し、それらがもっぱら首都に吸引されたのだった(小長谷 2003: 522)。

牧畜システムに関する近代的変容としては、とくに以下の3点を抽出しておきたい。第1に社会主義的集団化が行なわれたこと、第2に畜産物の開発が行なわれ工業原料として搬出されるようになったこと、第3に固定的施設への依存が高まったことである。それぞれ以下に解説する。

1. 社会主義的集団化

社会主義以前には、少数の富裕な遊牧民と多数の貧しい遊牧民によって社会は構成されており (Vreeland 1957: 32-35; 後藤 1968: 249-264 など), 富の再配分はチベット仏教寺院がある程度果たしていたと考えられる。1918年の調査によれば、寺院の所有する家畜頭数は全体の 19.1% であった (マイスキー 1926: 289)。各寺院にはジャスと呼ばれる財産があり、その畜群はジャスの家畜と呼ばれ、周辺に住む貧乏な遊牧民に委託放牧された。委託放牧の条件は多様だが (利光 1986), 原則として、所有権は移譲されないまま利用権が認められ、一部の畜産物が物納された。したがって、委託した遊牧民は私有家畜がなくても生計を維持することができた。

社会主義時代になると、貧しい遊牧民の家畜を少しずつ集めて牧畜協同組合の所有に転換する一方で、寺院所有のジャスの家畜をまとめてそのまま牧畜協同組合の所有に転換した。この後者の転換によって富を再配分する機能が移された。

牧畜に関する社会主義的集団化は 1957 年に戸数の 30.1%, 家畜頭数の 42.5% まで進み (外務省アジア局中国課 1962: 153, 127), 1959 年に 100% 達成したとされている。

2. 畜産業化

社会主義下の近代化によって、牧畜システムは、人々にとっての生活様式から国家にとっての産業へと転換した。国家の主要な産業として牧畜部門が確立するために、牧畜システムは畜産物の原材料を首都へ送り出すようになる。あらゆる畜産物が工業原料として都市へ搬出されるようになった。

1930 年代後半から「毛は黄金」というスローガンのもとで幹部みずから剪毛作業に従事してようやく剪毛が全国的に普及した (小長谷 2004: 112)。毛は各地方中心地に建設された工場ではフェルトに

加工されるほか、首都の工場では毛織物や絨毯に加工された。いずれもモンゴル高原では伝統的に生産されてこなかった産品である。豊富な獣毛がありながらも自ら織りの技術を持たなかった牧畜システムに毛の利用が付け加わった。

乳製品については鮮度が重要であり、都市近郊に酪農場が建設された。首都周辺では国営農場のもとに 11 の酪農場が建設され、そこで働く搾乳専門の女性たちは全国各地から移住して来た。

肉についてはトーバルと呼ばれる長距離移動を秋に行ない、首都にある大型の食肉加工工場を満たすようになった。さらに 1987 年になると、首都近郊まで追われてやって来た家畜を出荷前に一時的に肥育して肉の端境期を補填する目的をもった専門の農場も建設された。その結果、トーバル移動後には、群れの中の去勢オス畜比率は極端に下がることになる。

かつて軍事力の源であった去勢オス畜は、いずれの家畜種においても食肉産業用の原材料と化し、これによってモンゴル人の食生活も大いに変容した (小長谷 2005)。

3. 固定的施設化

移動性については概して定着化が進められたと言えよう。移動範囲を規制することになる行政区域はソム (郡) であり、この面積は清朝時代の旗よりも狭くなったところが多い。また、春や冬の宿営地には防寒施設が備えられるようになり、移動拠点の固定化が進んだ。さらに、自然災害に際してはもっぱら長距離を移動することによって難を避けていたが、こうした長距離移動も少なくなった。なぜなら、農業の進展とともに生産される麦類のふすまを飼料とし、農業との複合によるリスク回避が実現したからである。さらに、学校や病院などの社会サービスを享受するために、人々は形成された拠点の周辺にまとまって住むようにも

なった。

このように、生活様式全体として定着化は進んだが、同時に、生産様式としては移動化が推奨されてもいた（利光 1983）。オトルと呼ばれる移動は、かつて馬群の遠隔地放牧や逃避行を行なうための派生的な移動であった。これを以前にも増して積極的に秋に実施することによって、草原利用の高度化が推奨されるようになった。

また全国的な井戸の掘削によって、水資源の無い牧草地を利用することが可能となり、利用可能地域が拡大した。

四季折々の季節営地をもち、さらに秋営地には安住せずに点々と移動するという典型的な移動スタイルは、社会主義時代に推奨された標準モデルなのである。

以上のように、牧畜システムは従来の特徴を拡大利用しながら産業化という近代化の課題に対応して、結果的に家畜頭数は3倍に増えた（小長谷 2003 : 523）。

V 民主化以後の変容

1989年に民主化運動が活発になり、市場経済化への移行を進めたモンゴルでは「ショック療法」と呼ばれる経済政策が採用され、産業に対して公的な支援が行なわれなかったため、牧畜部門は他の部門とともに大きな打撃を受けた。民主化以後すなわち市場経済化によって、牧畜システムが被った最も深刻な変化としては、地域格差の出現と世帯格差の出現が挙げられる。

1. 地域格差の出現

社会主義時代はノルマとして一定量を納めれば、それらの畜産物が国家の市場において換金されて、給料として各自に支払われた。しかし、市場経済へ移行すると、畜産物を商品として搬出する公的

な販路が閉ざされた。距離が変数として大きな意味をもつこととなり、市場化をめぐる地域格差が生じた。県ごとに家畜の成メスの割合を見ると、ゴビ地域でメスが乳供給源となっているラクダを除いて、概して首都近辺や国境付近では成メスの割合が高く、言い換えれば去勢オスの売却が進んでいる（図1～5）。

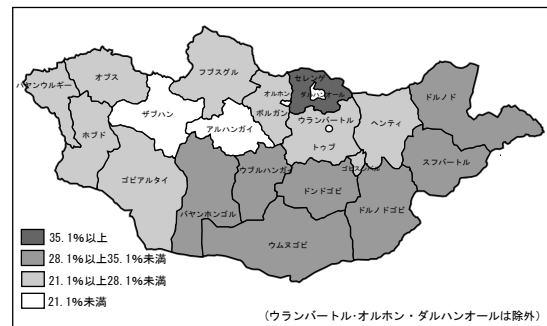


図1 ラクダ成メス割合

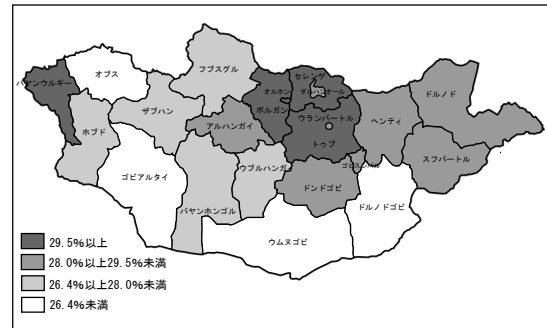


図2 ウマ成メス割合

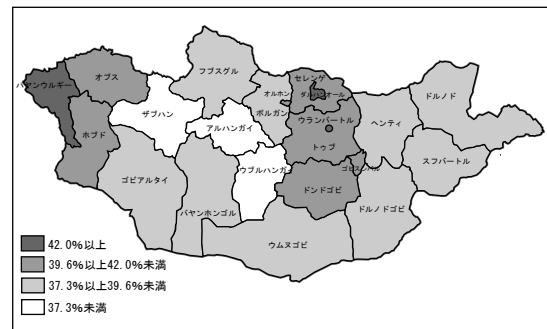


図3 ウシ成メス割合

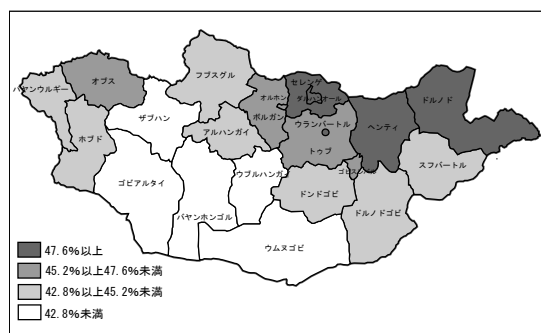


図4 ヒツジ成メス割合

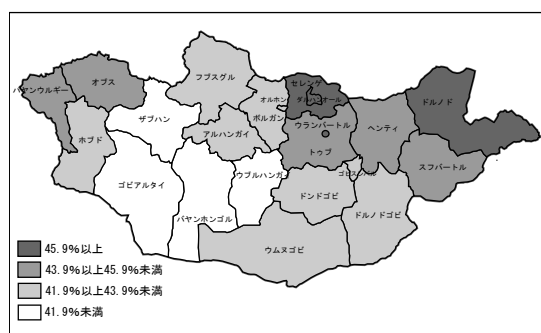


図5 ヤギ成メス割合

こうした市場経済化の格差を縮めるために、市場から遠い地域に生活する遊牧民はもっぱら首都部へ移動し、「大移動」と呼ばれている現象が認められる(表2)。

移入先は首都ウランバートルとダルハンオール県およびオルホン県である。ウランバートルは首位率がきわめて高く、ダルハンオール県(ダルハン)とオルホン県(エルデネット)は民主化以降に県として行政域が確定された工業都市である(小長谷1999:7)。移出先として人口減少の著しい県はオブス、ザブハン、ゴビアルタイ、バヤンホンゴル、アルハンガイ、ホブドと西部中央に集中しており、いずれも成メス比率が比較的低い。去勢オスの売却先がなく、商品化率が低いと推測される。一方、ゴビ地域では、カシミアの買い付けが盛んなために去勢オスの維持率が高く(成メス比率が低く)、とりわけ中国との国境貿易で潤うドルノゴビは人口減少が小さい。首都からの物理的

表2 2002年における人口移動(前川愛作成)

(National Statistical Office 2003より算出)

	(2002-2001の増加数)	純移動者数
	-自然増加数	／人口
	純移動者数	純移動率
ウランバートル	26,344	3.112%
ダルハン	908	1.034%
オルホン	156	0.202%
ドルノゴビ	▲ 165	-0.317%
バヤンウルギー	▲ 371	-0.375%
ゴビスンベル	▲ 51	-0.408%
フブスグル	▲ 550	-0.451%
セレンゲ	▲ 664	-0.650%
ボルガン	▲ 556	-0.876%
ドルノド	▲ 731	-0.980%
トゥブ	▲ 1,026	-1.063%
スフバートル	▲ 675	-1.203%
ヘンティ	▲ 933	-1.296%
ウムヌゴビ	▲ 718	-1.521%
ウブスハンガイ	▲ 1,880	-1.651%
ドンドゴビ	▲ 919	-1.795%
ホブド	▲ 1,771	-2.001%
アルハンガイ	▲ 2,372	-2.433%
バヤンホンゴル	▲ 2,499	-2.961%
ゴビアルタイ	▲ 2,476	-3.949%
ザブハン	▲ 3,456	-4.090%
オブス	▲ 3,760	-4.498%
全国平均	1,835	-28.169%

距離に加えて市場経済との経営上の距離を反映して、地域格差が生じている。

2. 世帯格差の出現

地域格差がある一方で、同一地域であっても世帯による格差もまた大きくなった。社会主義に特有な格差是正のシステムが排除された結果、現在

では、世帯ごとの経済格差が顕著である。

2006年に発行された2005年の統計によれば(National Statistical Office 2006), 1,000頭以上の家畜をもつ遊牧民は全体の0.70%であり、井戸掘削や固定施設の建設など資本投下力が高い。一方、50頭以下の家畜しかもたない貧困層は全体の37.00%, とくに10頭以下も10.77%に及ぶ。

2004年にウブルハンガイ県を通過する際に訪問した4世帯を比較すると(表3), 所有頭数の多い世帯ほど、多角的な畜産物を販売して安定的な現金収入を得ているのに対して、所有頭数の少ない世帯ほど、ヤギのカシミアに依存しており、経営が不安定であることが推察される。このように、頭数による世帯ごとの経済格差は経営戦略の差にほかならない。

2005年現在、専業の遊牧民は約36.4万人で人口の14.2%にまで減少しているが、地域格差と世帯格差を反映して多様化しており、牧畜システムにおける、移動性や経営戦略が多様化しつつある。

VI さいごに

個々の遊牧民がどのような経営戦略をとって移動するにしても、基礎条件として問題となるのは自然環境の劣化である。多くの劣化が指摘される中で人間活動に起因している最も大きな問題として以下の4点を指摘しておきたい。

第1に社会主義時代に建設された国営農場の大

表3 ウブルハンガイ県における4戸の比較

	家畜頭数	ヤギ率	現金収入	カシミア依存率
A家	500頭	35%	4,300 \$	3%
B家	300頭	40%	1,100 \$	40%
C家	200頭	25%	800 \$	60%
D家	100頭	25%	250 \$	100%

半は荒廃し、農耕地としてのみならず放牧地としても利用できないまま放置されており、環境改善を必要としていること、第2に大規模な鉱産資源開発や小規模な観光開発など非牧畜的利用が進展し、環境破壊をもたらしていること、第3に草原の維持に寄与する森林が火災や虫害によって減少しており、環境復元を必要としていること、第4に社会主義時代に掘削された井戸の大半が壊れたまま使用できなくなっており、水資源との組み合わせによる草原の利用が求められていることである。

付記

本稿は「モンゴル高原における遊牧とその近代化」『東アジアの歴史地理』朝倉書店(印刷中)をもとに大幅に改稿したものである。

(2006年9月22日受付 2006年12月12日受理)

文献

- 梅棹忠夫 1976. 『狩猟と遊牧の世界』講談社.
- 外務省アジア局中国課 1962. 『モンゴル人民共和国(宣伝員必携)上巻』外務省.
- 後藤富男 1968. 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館.
- 小長谷有紀 1999. 草原の国を変えた女性たち. 窪田幸子・八木祐子編『社会変容と女性—ジェンダの文化人類学』4-35. ナカニシヤ出版.
- 小長谷有紀 2003. 生まれ変わる遊牧論—人と自然の新たな関係をもとめて—. 科学 73: 520-524.
- 小長谷有紀 2004. 『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きる人々の証言』中央公論新社.
- 小長谷有紀 2005. 『世界の食文化モンゴル』農山漁村文化協会.
- 篠田雅人・森永由紀 2005. モンゴル国における早期災害警戒システムの構築に向けて. 地理学評

論 78: 928-950.

利光 (=小長谷) 有紀 1983. オトルノートーモン
ゴルの移動牧畜をめぐって一. 人文地理 35:
548-559.

利光 (=小長谷) 有紀 1986. モンゴルにおける家
畜預託の慣行. 史林 69: 770-794.

藤田 昇 2003. 草原植物の生態と遊牧地の持続的
利用—植物学からみたモンゴル高原—. 科学
73-5: 563-569.

マイスキー, I.M. 1926. 「現代蒙古」南満州鉄道株
式会社庶務部調査課編著『外蒙共和国(上)(下)』
に所収. 大阪毎日新聞社. 大阪

Dahl, G. and Hjort, D. 1976. *Having herds*. University

of Stockholm. Stockholm.

Humphrey, C. and Sneath, D. 1999. *The end of no-
madism?* Duke University Press. Durham.

National Statistical Office 2003. *Mongolian statistical
yearbook 2002*. National Statistical Office. Ulaan-
baatar.

National Statistical Office 2006. *Mongolian statistical
yearbook 2005*. National Statistical Office. Ulaan-
baatar.

Vreeland, H.H.III 1957. *Mongol community and kin-
ship structure*. Human Relations Area Files. New
Heaven.



<著者略歴> 小長谷 有紀 (こながや ゆき)

1957 年大阪府生まれ. 京都大学文学部助手, 国立民族学博物館助手, 助教授を経て
現在, 国立民族学博物館研究戦略センター教授. 文学修士. 文化人
類学・文化地理学を専門とする. 著書に『世界の食文化③モンゴル』
『モンゴル草原の生活世界』など. 国立民族学博物館研究者ホーム
ページ <http://www.minpaku.ac.jp/staff/konagaya/>